

示し、同領域での病状が初期の様相を呈していたため、初診時からの免疫グロブリン製剤の投与は適切であり、

さらに投与後、皮膚粘膜症状が好転した事より投与は有効であったと判定した。

20. 金属アレルギーが原因と思われた頬粘膜扁平苔癬の1例

中川哲郎, 金澤正昭, 中川 徹
奥村一彦, 道谷弘之, 武田充弘
村瀬博文*, 富田喜内, 日影 盛**
坂口邦彦**, 大野弘機***, 賀来 亨****
奥山富三****
(口腔外科 I, 口腔外科学第 II*)
(補綴 II**, 理工***, 口腔病理****)

口腔扁平苔癬は、口腔粘膜に発症する原因不明の難治性の慢性炎症性角化症である。このたび、我々は金属補綴物が原因と思われる口腔扁平苔癬の1例を経験したので報告した。

症例は39歳の女性で、初診8ヶ月前から、右頬粘膜にしみる感じがあり1週間前から、このしみる感じが増強したため来院した。口腔外には、異常所見を認めないが、口腔内をみると、右頬粘膜に、類円形の白線で囲まれ、その内部に錯走する白線と軽度の黒色の色素沈着を伴った病変を認め、左頬粘膜・顎間皺襞部・臼後三角部にも小さな白斑を認めた。また、右頬粘膜の病変の組織像では、上皮層に軽度の parakeratosis と acanthosis をみるとともに上皮下にリンパ球の帯状の浸潤を認め、免疫組織化学的検索では、ほとんどのリンパ球が Tcell であった。また、上下顎の左右臼歯部に銀合金製の歯冠補綴物が装着され、これは2年前に装着したものであった。なお、患者は、消炎鎮痛剤、卵およびコーヒーなどより蕁

麻疹が出現し、また金属製装身具の接触部位に掻痒感を覚えるとのことであった。

以上のことから口腔内の病変は金属冠に起因することが考えられたため、これらを撤去し経過を観察するとともに、歯科用金属シリーズ (M-7) を用いたパッチ・テストを施行した。その結果、1%および2%塩化第2スズで陽性反応を示した。その後の経過は、2か月後には左右の病変は著明に改善され、右頬粘膜部の刺激痛も完全に消失した。そして6ヶ月後には両側頬粘膜の病変は完全に消退した。その後、結晶化ガラス・セラミックで再補綴を行い経過を観察しているが、1年後の現在、再発を認めない。撤去補綴物の HSCA-HNG 法による組織分析では、スズが15%含有されていることが判明した。この時点で再度パッチ・テストを施行したが、前回と同様の結果を得た。以上の結果、本症例は、スズ・アレルギーによる扁平苔癬であることが示唆された。

21. 術後の後出血により発見された von Willebrand 病と思われる2例

谷内健司, 山田 雄, 松崎弘明
道谷弘之, 額賀康之, 山下徹郎
金澤正昭, 村瀬博文*, 富田喜内*
佐藤雅寛男**, 安河内太郎**
(口腔外科 I, 口腔外科 II*, 内科**)

今回、我々は、口腔外科的処置に際し、術後の異常出血をきたし、当初その原因を特定できなかったが、その後の検索により、von Willebrand 病である可能性が示唆された2症例を経験したので、その概要を報告した。

症例1は43歳、男性で、 $\sqrt{8}$ 濾胞性歯嚢胞の摘出術後、数日間は出血を認めなかったが、術後10日目に突然手術創から多量出血をきたした。ルーチンな臨床検査では異